

くらしと協同をたずねて02

「全国“おたがいさま”交流集会 in 神在月しまね」を訪ねて

石井友梨・坂口恵里子・西藤千晶・児玉伊津季・(監修：青木美紗)

(奈良女子大学生生活環境学部生活文化学科)

2002年に有償たすけあいシステム「おたがいさまいずも」が生協しまねに誕生してから約14年が経過し、現在「おたがいさま」は全国に10県20団体にまで広がりを見せている。地域や家族のつながりが希薄化し、ちょっと手伝って欲しいけど気軽に頼める人がいないという悩みを抱えている人が増えている現状があり、それに対応するものとして生協組合員が中心となって非組合員も巻き込んだ「おたがいさま」を展開しているのである。

このように「おたがいさま」が全国的に拡大するなか、2015年11月7日にくらしと協同の研究所にて「おたがいさま4生協交流会」が開催された。この流れを受けて、2016年11月11日～12日に、「全国“おたがいさま”交流集会 in 神在月しまね」が開催された。全国から20の「おたがいさま」が結集し、成果や課題について意見交換がなされた。交流会の内容としては、1日目に学識者による講演と各「おたが

いさま」の紹介、2日目に「おたがいさま」活動に関するグループワークが実施された。

本稿では、この交流集会に参加した奈良女子大学3回生の学生4名に、若年層に「おたがいさま」がどのように写ったのかをご紹介させていただきたい。若い世代の視点もご参考にしていただければ幸いである。

「想い」で動く有償ボランティア

私はこの交流集会に参加するまで、ボランティアとは無償で行うものであるからこそ、人々の想いが価値を生み出すものだと思っていた。したがって、「有償ボランティア」という言葉が新鮮であり、どのような点で仕事と異なるのか疑問を感じた。

無償で行われることが多いボランティアであるが、交流集会では有償で行うことの利点を大きく二つ述べていた。一つ目は、利用者が負い目を感じることなく継続的に利用できることである。無償であれば言いづらい些細な困りごと、有償にすることによって利用者は気軽に「困っている」と声を出すことができるという。二つ目は、応援者やコーディネーターとして活躍する女性が家を出て活動しやすくなるという点である。ボランティア活動が無償である場合、継続して活動することは家族や周りの人の理解が得られにくいかもしれないが、有償にすることで女性の活動範囲が広がる



浜岡政好先生による基調講演

と考えられている。このように、利用側と応援側の双方にとって有償であることのメリットがあることがわかる。

この有償というボランティアを応援側はどのようにとらえているのだろうか。交流集会ではコーディネーターとして活躍されている方々に多くの話を聞くことができた。その中でコーディネーターの活動内容は驚くほど大変なものであるように思えたが、多くの人は「これはボランティアであって仕事とは違う」と口を揃えて言っていた。有償であることや活動内容を考えるとボランティアではなく仕事として捉えてもいいのではないかと感じたが、あくまでもボランティア活動であり、報酬を当てにして活動しているのではなく、「助けたい」という想いだけで動いているように見えた。

このように、「おたがいさま」は人の想いで動く点はボランティアであるが、有償にすることで多くの人が関わりやすくなり継続的な活動になることがうかがえた。この価値に共感できる人を増やしていくことが「おたがいさま」の発展には必要であると考えられる。(石井友梨)



各「おたがいさま」の事例報告

有償ボランティアの 意義と課題

これまで「ボランティア」といわれると、「無償でサービスを提供し、誰もが平等に利用することができるもの」というイメージが強く、特に「無償であるからこそ意味がある」と思い込んでいた。そのため「有償」という形式をとると、「利用者が限られてしまうのではないか」「お金をもらう行為をボランティアと位置付けてよいのか」など、疑問に思うことがいくつかあった。しかし交流会に参加し、実際に活動している「おたがいさま」の話を聞くうちに、有償であることでさまざまな配慮ができることがわかった。

例えば「利用者」が「応援者」に依頼する立場に立つため、無償であれば利用者が申し訳なく思うようになり、継続して利用しづらくなるケースがあるという。「おたがいさま」はあえて「有償」という形態をとることで、「利用者」の心の負担を軽減し、両者をフラットな立場におくことで、利用しやすい工夫がなされていた。

しかし一方で、利用者から「料金と仕事の質が釣り合っていない」という声や、応援者から「もっと報酬を上げてほしい」という声があるなど、「有償である」という事から引き起こされる課題も存在することがうかがえた。有償ではあるものの、仕事ではなくあくまで「ボランティア」というスタンスを維持することの難しさが顕著に表れているように感じた。多くの人が持っているであろう「ボランティア」=無償である、という固定概念をなくしていくことが第一歩として必要なのではないだろうか。このような課題はあるものの、「有償」であるからこそできる配慮があるということ

は私にとって新しい気づきであった。有償ボランティアとしての活動が広く受け入れられるようになれば、「ボランティア」として活動できる幅が広がり、より多くのサービスが提供できるようになると思う。(坂口恵里子)



グループワークの様子

「思い」は「重い」

交流集会第二部では、各おたがいさまの方々と10人ぐらいずつに分かれて、「私とおたがいさまを語る」というテーマに沿ってグループワークが行われた。その中で最も印象深かったものが、ある応援者さんから発せられた「思いは重い」という言葉である。

その応援者の話によると、利用者である一人の年配女性のもとに掃除を主とする応援に行くことになり、何度も通うにつれて、その年配女性は応援者のことをとても気に入り、応援活動後に自分の洋服をプレゼントするようになったそうだ。年配女性からのプレゼントは何度も続き、応援者は年配女性の「思い」は嬉しかったが、そのプレゼントを素直に受け取っていいものなのか悩んだという。受け取ってしまえば、年配

女性の着る服がなくなってしまう。しかしながら、受け取らなければ年配女性の「思い」を踏みにじり、傷つけてしまいそうで簡単には断れなかったそうである。結局、応援者は年配女性の家族に連絡を取り、受け取るふりをしてこっそりと年配女性の家のタンスの奥にしまっていたそうだ。

有償ボランティアという「おたがいさま」の活動がうまく機能するためには、利用者にとっても応援者にとっても負担にならない、ということが求められるように思う。利用者が応援者にとって喜ばしいことだと思って行動したとしても、残念なことに、応援者にとってはお節介な行動であったという場合があるようで、利用者と応援者が逆の場合もあるだろう。

せっかく応援したいと思っていても、伝えたいことを伝えることができず、利用者との「思い」がすれ違い、その「思い」が「重い」ものとして相手に受け取られてしまうことはとても悲しいことである。「おたがいさま」は、そのとき限りの付き合いかもしれないし、継続して行われる長期的な付き合いになるかもしれない。しかし、どちらにしても利用者と応援者がプラスの感情をもってお互いを「想い」、その応援活動を終えられるよう、伝えるににくいことを伝えることができる関係づくりを心掛け、お互いが楽しく取り組めることが一番大切なことであるように感じた。(西藤千晶)

「おたがいさま」の「想いの力」

私が普段利用する生協は大学生協のみである。そのため地域生協の活動である「おたがいさま」のことは、今まで利用することはもちろん、存在も知らなかった。しかし今回交流集会に参加することによって、

「おたがいさま」のはじまり、活動内容、今後の期待など、社会的背景から実践例に至るまで多くの話を聞くことができた。その中で、全国の「おたがいさま」が地域とつながることや地域の人をつなげることに対して強い「想い」があり、それが大きな力になっているということを強く感じた。交流会において、講演でもワークショップでも参加者は皆、胸を張って自身の地域の「おたがいさま」を紹介していた。あまりにも多くの参加者が、地域とつながることの喜びを語っていたため、「裏では苦しんでいることや、おたがいさまの欠点などもあるのではないか」と疑問をもった。そこで、参加者の方に「何か大変なことはないのか」と尋ねてみた。すると、「大変なこともあるが、利用者の方が『ありがとう』と言ってくれることの喜びの方が大きい」「地域の人とつながることが楽しい」という答えが返ってきたのである。このような言葉から、彼・彼女たちは活動を心から楽しみ、やりがいを感じているということが伝わってきた。他にも、「おたがいさま」を通じて何でも話し合える人に出会えたという方もいた。活動を行うことによって、普通なら出会うことのない幅広い世代の人や地域の人とつながることができるという。このことも、彼女たちがおたがいさまを誇らしげに語る理由であるだろう。

「おたがいさまが人を元気にするのか、それともおたがいさまに集まる人が元気な人なのか」と交流集会の中で問いかけられていた。このような問いが示しているように、「おたがいさま」の人たちはパワーで溢れていた。少子高齢化などによって地域の活力が薄まりつつある現在、彼・彼女たちの「想いの力」を若い世代が引き継いでいくことが大切であり、また、そうすることにより、地域に活力が蘇り生き生きとし

た暮らしを生み出すことができるのではないだろうか。(児玉伊津季)



学びの多い2日間でした！